

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	模擬患者 (Simulated Patient: SP) 参加型シミュレーション教育の学修効果分析および方略検討				
研究組織	代表者	所属・職名	短期大学部 歯科衛生学科・准教授	氏名	長谷 由紀子
	研究分担者	所属・職名	短期大学部 歯科衛生学科・教授	氏名	仲井 雪絵
		所属・職名	日本医学教育学会 学会国際化委員会・委員	氏名	吉田 登志子
		所属・職名	岡山 SP 研究会・代表	氏名	前田 純子
		所属・職名	岐阜大学医学教育開発研究センター・講師	氏名	今福 輪太郎
発表者	所属・職名	短期大学部 歯科衛生学科・准教授	氏名	長谷 由紀子	

講演題目	模擬患者 (Simulated Patient: SP) 参加型教育による学生の認識変化と効果的な学修方略
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>【背景と目的】患者-医療者間、医療チーム内の人間関係を基盤とする医療において、コミュニケーション能力の向上は不可欠である。本研究では、その教育方法として、模擬患者 (Simulated Patient: SP) 参加型シミュレーション教育を歯科衛生学生に対して導入し、その学修による学生の認識変化を分析、効果的な学修方略について検討した。</p> <p>【方法と結果】2022年度歯科衛生学科2年生を対象に、連続した3限(90分×3)で講義と演習を組み合わせたSP参加型シミュレーション教育を導入した。具体的には、医療コミュニケーションの技法や初診時の医療面接における質問項目に関する講義と、その後SPとあるいは学生同士で初診時の医療面接のロールプレイと振り返りセッションで構成される演習を実施した。演習は6~7人のグループで6回(SPとのロールプレイを内2回)行い、学生は、歯科衛生士役、患者役、観察者役の役割を各1回以上担うこととした。講義および振り返りセッション終了後に学生が記載した振り返り記録の記載内容を、本授業からの学生の認識変化の視点から質的に分析した。学生は講義後には、最初のコミュニケーションとなる初診時の医療面接では安全で確実な治療を行うために患者から必要な情報を引き出し、信頼関係を構築する場になることを認識していた。SPとのロールプレイでは、講義で視聴したお手本の医療面接の動画や手元にある問診票の項目に沿って面接を進めようとする中で、患者の訴えや感情が置いていかれ、患者情報の取得はもちろん患者との良好な関係を構築することが困難な事例が多かった。学生はSPからのフィードバックにより、マニュアル通り一方的に質問を重ねても、対話や必要な情報を得ることができず、面接の中で患者の言葉や感情を受け止め、ひとつずつ深めて掘り下げて行くことの重要性に気付いた。また、ロールプレイでは無意識に“素”の自分の言葉や態度が出現し、自らのコミュニケーションスタイルを認識する機会となっていた。またコミュニケーションを通して患者へ誠実さや気遣い、そして真剣さが伝わることを学び、その医療面接の場でコミュニケーション技法を活用し、共感や傾聴を表現する必要性を学んでいた。</p> <p>【今後の展望】学生同士のロールプレイや他者のロールプレイの観察によって、医療コミュニケーションに関する気づきを得ることはできるが、リアリティのあるSPとのロールプレイとSPから直接のフィードバックによる振り返りからの気づきによる学修効果はさらに高い。今回は約1/3の学生がSPのロールプレイとフィードバックを実施できた。今後は人的・時間的資源を確保し、全学生に学修効果が高いSPとのロールプレイを、可能であれば複数回(臨床実習前・臨床実習後)実施し、学生がコミュニケーション能力の向上を確認・自覚できる学習環境を整備していきたい。</p>